

平成24年度 卒業論文

北海道の木工産地における木育活動の展開と意義
-遊具・食器・家具にみる産地の繁栄と生活の豊かさ-

研究グループ	産業教育研究グループ
学生番号	07080048
氏名	三原洸太郎
指導教員	上原慎一准教授,駒川智子助教

目次

序章

- 第一節 はじめに
- 第二節 木育活動を生み出す社会的背景
- 第三節 先行研究
- 第四節 北海道の木工産地
- 第五節 木育の展開
 - (1) 未来の木育を担う人材育成
 - (2) 「木育」という旗印
- 第六節 調査対象・調査方法

第一章 北海道の木工産地と木育

- 第一節 遊具—木育と地域興し—
 - (1) 木製遊具導入のすすめ
 - (2) 街に活気を もりもりパーク
- 第二節 食器・クラフト —人を育てる—
 - (1) 子どもたちとかつて子どもだった人への贈り物 **KEM工房**
 - (2) 人を育てる産地の挑戦 オケクラフトセンター
- 第三節 家具 —地域との繋がりを目指して—
 - (1) 産地の繁栄を目指して 旭川家具工業協同組合
 - (2) 居場所を届ける 君の椅子プロジェクト

第二章 木育活動の意義

- 第一節 木育活動の分析
 - (1) 人材育成
 - (2) 経済の活性化
 - (3) 広報活動
- 第二節 新しい木育活動の展開
 - (1) 教育の現場へ デザイナー煙山泰子の挑戦
 - (2) 地域を知る手法としての「木育」 木育マイスター萩原
- 第三節 地域とのつながりによる木育活動

終章 おわりに

参考文献・参考資料

序章

第一節 はじめに

林業・木材産業の衰退と環境問題が深刻化しているため、林野庁は産業の再生と森林の適切な整備を目指して、「森林・林業基本計画」を打ち出した。また林業と木材産業の盛んな北海道でも持続可能な社会を目指して、「北海道森林づくり基本計画」を定め問題に取り組んでいる。なかでも最も注目されている活動が木育活動である。林野庁は、「木材利用に関する教育」を推進したが、北海道庁はそれだけに留まらない理念と活動の多様性を持たせた「木育」を打ち出し、積極的に広めている。「木育」とは、「子どもをはじめとするすべての人が『木とふれあい、木に学び、木と生きる』取り組み」¹である。

「木育」が道庁によって推進されるとともに、木育活動の中心的担い手となる「木育マスター」を養成し始めた。現在では120名の木育マスターが輩出され、彼らを中心に、自然体験学習のインストラクターや木工家、学校教師、林業職員など多様な人々によって取り組まれている。木育活動は毎週北海道のどこかで開催されるまでに成長しており、活動分野も森歩きや木工教室、子育て支援や学校教育など多岐にわたる。

木は私たちの生活に、なくてはならない存在である。しかし普段、木や木製品について気に留めることは少ない。木育活動を通して、木の大切さや知識を学び、これまでの生活スタイルを見直すことによって、自然も人間も豊かに共生できる社会を作っていくことが出来る。

北海道の木工産地では、古くから製材業が行われており、木工産業と林業の結びつきが強い。すなわち、木育が盛んになることによって、木工産業と林業が共に繁栄する道を切り開くことができる。

以上の問題意識に基づき、本稿は、北海道の木工産地を対象に、各地で取り組まれている様々な木育活動に着目し、木育活動が、産地に経済的な影響をもたらし、生活に豊かさを創出する人々のネットワークの過程や自身の生活を納得のいくスタイルに再構築していく喜びを明らかにすることを課題とする。分析に際しては、遊具・食器（クラフト）・家具に焦点を当てて考察を行う。遊具・食器・家具は、人の成長に合わせて生活に寄り添い続けるものである。木育活動を通して、それら三つがより良い形で人々の生活に取り込まれ、森や木、木製品と暮らしの関係性を感じ、上手な付き合い方を見つけていく社会のきっかけとなりつつある。さらに、遊具・食器・家具と生活をつなぐ以上に大きな可能性を木育活動は秘めている。本稿の調査を通して、木育活動に積極的に参加する人々が「木とのつながり」・「知識とのつながり」・「生活とのつながり」を獲得していく姿が浮かび上がってきた。木育活動は、三つのつながりをうまく循環させることで、個々人が生活の在り方を見直し、より豊かな社会を目指す取り組みに繋がる。さらに、安価な大量生産品の使用を控え、良いものを永く愛

¹ 木育推進プロジェクトチーム作成、平成17年3月『『木育』プロジェクト報告書』より

用するようになることで、産地への経済効果をもたらし、木工産地の素晴らしい技術が後世に継承されていく。木育活動は、そんな持続可能な社会を実現させる可能性も感じさせる。

第二節 木育活動が生み出された社会的背景

森林の大量伐採や二酸化炭素などの温室効果ガスの増加によって、木材資源の減少や環境破壊、異常気象が世界各地で問題になっている。それらの問題は日本においても例外ではない。また林業・木材産業においては、不景気の煽りを受け、産業が成り立たなくなると同時に、整備が遅れ、産業に蓄積されるべき技術が失われる危機に瀕している。国や地方自治体はそれらの課題に対処するために政策を打ち出している。国は林業・木材産業の再生を目指し、国民のニーズに応える森林の整備や安全・安心の確保のための治山対策、国産材の利用拡大を中心に据えた「森林・林業基本計画」²を策定した。

日本最大の森林面積を誇る北海道は、国内外を問わず、適切な森林活用や地球温暖化をはじめとする地球規模の問題、生物の多様性の保全活動への貢献を期待されている。そのため、北海道は全国に先駆けて「北海道森林づくり条例」³を制定し、それに基づいて「北海道森林づくり基本計画」⁴を打ち出した。条例では、3つの基本的な方針が定められている。それは、「森林の保全・整備」と「林業・木材産業の健全な発展を通じた森林資源の循環利用」そして「森林づくりへの道民の理解と参加」である。「森林の保全と整備」は、地域の特性に応じた土砂災害や水災害への対策に森林づくりを通して行い、併せて地球温暖化防止にも対応していくものである。「林業・木材産業の健全な発展を通じた森林資源の循環利用」は、林業及び木材産業の発展に向けて、必要かつ適切な資源管理を行いつつ、地産地消や人工林資源を活かした林業再生を進めていき、木材産業を通じて人々に積極的に利用される仕組みづくりをおこなうものである。「森林づくりへの道民の理解と参加」は、道民と協働して森林づくりを進めるために、道民の理解と参加を促すものである。これらの基本方針にのっとり基本計画では、森林の調査や地形・気候と森林の関係分析、気象害に強い森林の整備、森林作業技術に対応した研修の推進、地産地消・道産木材の有効利用の普及促進などの活動を行ってきた。本論文のテーマである「木育」も、道民の理解と参加に「木育」を通して推進することが定められている。

そもそも木育は、平成16年7月23日に開かれた「女性知事リレーフォーラム in ほっかいどう」において、北海道知事の高橋はるみが食と地域の未来を考えるシンポジウムの際に、「木や森を作ることに伴う人づくりが大切である」と訴えたことに始まる。国が推進している食育に対して、木育は注目度が低く、また森林の整備とともに後の時代の担い手を育てて

² 「森林・林業基本計画」、林野庁、平成13年10月26日

³ 「北海道森林づくり条例」、北海道庁、平成14年3月

⁴ 「北海道森林づくり基本計画」、北海道庁、平成15年3月

いく必要性を鑑みると、50年、100年、それ以上の視野で考えていかなければならない活動である。フォーラム後、ネーミングも含めて様々な検討が始まった。

そして、平成16年「協働型政策検討システム推進事業」の中で、ネーミングが「木育」に決定した。木育の名前が決定して平成16年には「木育推進プロジェクトチーム」が発足された。ここでは、木育の意義や理念、必要性、対象範囲、現地検討会、木育の取り組み方策・提案等が検討され、報告書が知事に提出された。

報告書を受け道庁は、森林づくりのプログラムの実施や体験活動のできる森の認定を行った。また木材利用と森林づくりの講演会や木製遊具の体験広場を設置して、木育活動を行ってきた。

このようにして始まった木育活動が、現在北海道の木工産地においてどのような取り組みがなされているかを、遊具・食器・家具の三つの視点で調査した。そして木工産地での木育活動が森林保全の推進や道民の理解・認知に繋がり、経済的な効果を生み出す可能性を模索する。また木育活動が生活の中で豊かさを創出する過程にも着目する。

第三節 先行研究

木育活動自体に関する先行研究は、とても少ない。2006年に始まった若い活動であることもその要因ではあるが、最も大きな原因は、木育の定義が曖昧であることだ。「木育」とは「子どもをはじめとするすべての人が『木とふれあい、木に学び、木と生きる』取り組み」であり、具体的な活動は示していない。また木育のキーワードの一つに「あれも木育、これも木育」というものがある。これは木育活動の裾の広さを示しているが、それと同時に木育が如何に定めようのないものであるかを提示している。明確に定めていないことが、自由で豊かな取り組みの在り方を可能にしている。現在、木育には、言葉としての定義には力点はなく、自由で多様な活動を推奨するキーワードとして働いている。

そこで、具体的な木育活動がイメージしやすいように、これまでの活動を「事例」・「対象者」・「内容」・「ねらい」・「備考」に着目して以下の表1に示す。

表1

事例	対象者	内容	ねらい	備考
木のプールで遊ぶ	1歳～	木のプールに入って遊ぶ。	木の玉に触れながら遊ぶことで、木の質感を感じさせる	自由に遊ぶ中で、必要に応じて声をかけたり、ともに楽しむ中で「木の楽しさ」や「新たな気付き」を生まれるように配慮する。

木のマグネットを作る	3歳～	樹種の異なる2個の木片に紙ヤスリをマグネットシートを貼り、木のマグネットを作る。	木片を紙ヤスリ加工することにより、木の種類によって硬さ・香り・触感・色や木目が違うことを感じながら手作りの楽しさを実感する。	作業前後及び作業中を通して、森林と木材のつながり、木の特性や加工性、木と人とのつきあい方など、話に拡がりを持たせる説明や語りかけに配慮する
木の保育園を作ろう	幼児	幼児に森から種を拾ってきてもらい、その種を苗床に植えて育て、3年後に植樹する。	木というものが、種から育ち、育つには時間がかかること感じてもらう。また育てた木を、植樹することで森に対する愛着を持たせる。	種子や苗床づくりに詳しい人に協力をお願いし、指導を受けながら進めていく。
自然の中の絵本の読み聞かせ	幼児～小学生低学年	森などの自然の中で、子ども達のお気に入りの絵本を読み聞かせる。	森の温度や湿度、音や匂いなど、五感を働かせながらお話を聞くことによって、内容を想像力豊かに、かつ体感的に理解するなど、豊かな感性が育む。	子ども達の集中力や空間に木を配り、安全な拓けた場所で、子ども達を座らせて、あまり長くない絵本を読み聞かせること。
葉っぱコンテスト	幼児～大人	「大きい葉っぱ」などといったお題に合わせて葉っぱを探し、参加者同士で競い合う。	楽しみながら、いろいろな葉を探し、探す楽しさを知り、木や森に対する興味を促します。また、葉の形状などの多様性を知ること、森林の樹種の多さに気づき、森林の豊かさを学ぶ。	北海道の森は針広混交林で樹種が多いことが特徴なので、そういったことを知るきっかけになるような進行に努める。なお就学児童の学習段階に合わせて、話を展開していくと学校の知識と結びつく。
木育の玉手箱	小学生～	KEM 工房のオリジナル教材「木育の玉手箱」を使う。	北海道産の代表的な樹種の特徴や木の特性を体感的に学ぶ。	参加者同士のコミュニケーションが吐かれるように、グループ単位や向かい合わせにする。

007 この木を探せ	小学生～	参加者が考えたヒントを頼りに、別の参加者が木を探し出す。	木を探しながら感覚を養い、参加者同士のコミュニケーションを促します。木をよく観察し、ふれあうことで木に興味をもってもらい、木を見るためのポイントを知る。	木の幹を触ることになるので、ツタウルシなど触るとアレルギーが出るようなものは、事前にレクチャーしておく。
木製バットの年輪を数えよう	小学生 中学年	木製バットの年輪数、年輪幅を測定し、バットに適した樹種や林齢、資源背景について学ぶ。	スポーツ用具という身近な素材を通じて、木の成長過程、年輪の形成、材質について学びます。北海道がバット材生産の好適地であることを知るとともに、木材資源を維持することの重要性を認識し、植樹活動などへの関心を喚起する	最初に年輪形成の仕組みと断面によって、どのような年輪が現れるかなど、基礎知識の説明が必要。そこからプロ野球選手が使うバットを選手別に調べるなど、学習を発展させる。
音で比べる樹種の違い	小学校 高学年～	木琴を製作し、音の性質や樹種の違いなどを学ぶ。	木琴の製作を通じて、ものづくりの楽しさを体感するとともに、音に関する様々な要因について学ぶ。	木琴は、木片の厚さや長さを変えることで音階を作っているが、音の高さには、密度や強度なども関係していることを説明する。北海道が楽器材の産地であることも伝える。
森や木に関わる仕事人の話を聞き書き	中学生～ 大学生	地元の森や木に関わって仕事をしている人を尋ね、仕事内容や木の魅力について話を聞き文章にまとめる。	森林や木と接しながら仕事をしてきた人から直接話を聞き文書にまとめることによって、林業の現状や苦労など森林に関する理解を深める。	長年の経験から実感した木の魅力や森の大切さが伝わることも期待したい。 また人とのコミュニケーションのやり方を学ぶ機会にもなる。

木と音楽を感じよう	大人	自分で作った椅子に座ってクラシック音楽を聴く。	椅子作りを通して、その楽しみと苦労を実感する。作成後は、情感を高める効果のあるクラシック音楽を聴き、ものづくりを振り返る。	木工機械はとても危険なため、熟練者がそばに付いて作業を行う。 様々な樹種を用意して、体験者に好みの材を使ってもらい、体験者同士で木の特性の違いについて会話を楽しむ。
木の床を考えよう。	大人	自分の家や学校、施設の床を「木の床」に変える場合を想定してディスカッションする。	木材の特徴を理解しつつ、木の床をデザインする過程を通して、自分の生活や育環境と木の関わりを考える。	森の近くで議論することによって、フィールドに出向き、立木の特徴や匂いと材の違いなどを実感することができる。
私と木の自己紹介	小学生～	参加者が、木や森への思いが詰まった物を持ち寄り、その思いについて自己紹介とともに発表し合う。	大切な「木」が、生活や人生の中にちりばめられていることや木に対する多様な価値観があることを知り、木に対するイメージを広げる。	木育プログラムの導入(アイスブレイキング)として使うと良い。各人の多様な価値を尊重し、肯定的な雰囲気を作ります。
木のスプーンでアイスクリームを食べよう	0歳～	木のスプーンとステンレスなどのスプーンで、アイスクリームの食べ比べをする。	木と他の素材の違いを、アイスクリームを食べることで感じてもらう。また、木育と食育とのつながりを考えるきっかけにしてもらう。	時間があれば、木のスプーン作りやアイスクリーム作りから始めると、一つのプログラムになる。
木育キッズクラブ	幼児～	延長保育や課外活動、休日の親子プログラムとして実施する。	木にふれ、木を育て、木を使う経験を通して、木を中心にした循環型のライフスタイルを身につける土台をつくる。	保護者から「自然の中へ行くのを楽しみにしている」「家出もお手伝いをしたがるようになった」「モノを大切にするようになった」「優しくなった」などの感想があった。

木と森から始まるコミュニティづくり	小学生～	地域の材を用いて、ログハウスを作り、新しいコミュニティを作る。	自分たちが手がけた材で、ログハウスを作り上げる、それと同時に、先人達の知恵・技を伝授する場を生み出す。また幅広い年代の参加者を集めて、交流を促す。	木を伐るところから始まり、木の皮を向いて材に仕立て、ログハウスを作るので、長期間のプログラム進行と安全管理、準備が必要。
木育ツアーの実施	大人	木に関する専門家や建築士、デザイナーなどを対象に木工家具が出来るまでの流れを体感してもらう。	木工家具の価値を、川上から川下までの流れ(森林、製材、デザイン、加工、製品、販売)の中で実感してもらう。旭川周辺で家具産業が発達してきた背景を理解してもらい、北海道で生産された木製家具の普及に繋げる。	参加者の声「日頃は製材された木しか見ていないが、実際に木が生えている森から順番に製材、加工、使うシーンを見学できて、大変勉強になった」「旭川で家具産業が発達してきた理由がよく解った。豊かな自然と木材加工技術を持つ人などのつながりがあってこそだと思った」
出前シルバ一森林浴	大人	老人ホームに入居する高齢者及び職員とともに森林浴に出かける。	森林浴による引きこもりの防止や高齢者の憩いの場としての活用、地域社会への参加促進をねらいとした。	雨天は、室内で木育活動をして、次回の森林浴へのモチベーションを上げる。

注) NPO 法人ねおすの資料より編集

上記のような木育活動の事例を写真と共に解りやすく紹介している文献として、煙山泰子・西川栄明による『木育の本 木とふれあい、木に学び、木と生きる』⁵が挙げられる。この文献では、全国の木育活動が紹介されており、木製遊具の導入や自然体験活動、森林療法、木が製品になるまでの過程の学習、地方自治体のプロジェクトなど広く取り上げられている。活動対象は、子どもから高齢者までであり、木育活動の分野の広さと深さがうかがえる。

木育活動の中心的人物である著書の煙山・西川は、この本の初めに「私の木育宣言」を掲げている。「私の木育宣言」とは、ひとりひとりにとっての「木育」が如何なるものであるかを宣言したものである。例として煙山・西川の「私の木育宣言」を本文献から一部抜粋す

⁵ 『木育の本 木とふれあい、木に学び、木と生きる』 煙山泰子・西川栄明著 北海道新聞社 2008年10月

る。

煙山泰子氏の「私の木育宣言」(p4～5)

「人の心に木を植える。木育は心の森づくり。

日本は『木の国』と呼ばれてきました。私たち日本人は最も身近な素材として木と永く付き合い、それが木の文化として受け継がれてきました。永い時間をかけて、身近な生活の中で人が木と作って来きた暮らしは、森林資源の保全と活用のバランスがとれた美しい森を育んできました。それは同時に、森の恵みに感謝して生きる日本人の心も育んできたのです。

<中略>

ひとりひとりの心に芽生えた木育の種が木に育ち、人がつながれば心の森も大きく広がります。そして、心の森が緑の森とつながる時、地球は生命の輝きと美しさで満ちるでしょう。私たちが目指す未来は、全ての生き物が共生して生きる持続可能な社会です。木育を『つながり』のキーワードとして、さまざまな活動の中で人と人、人と自然との関わりを考えられる豊かな心が育まれてゆくことを願い、ここに木育を宣言します。」

西川栄明氏の「私の木育宣言」(p6～7)

「<前略>

木育とは、人が木を育てるということではない。子どもにだけ木のことを教えればよいというものでもない。子どもも大人も関係ない。人と木と森とが、よい関係を保ちながらお互いが育まれていくのだ。

では、具体的には何をするのか。それは、いろいろな行動や活動が考えられる。でも、数値目標、カリキュラムなどといった堅苦しいものばかりにしばられなくてもいい。『森の散歩をしていると、なんだか気持ちが癒されて・・・』『自分で削りだした木のスプーンでアイスクリームを食べたら、うれしくっておいしかったなあ』『ナラの椅子に座って本を読むのが気持ちいい』『うちの息子はブナの汽車のおもちゃで遊ぶと機嫌がよくなる』。などなど。そういう気持ちが生まれることが大切なんだ。まず、そこからスタートだ。

もっともっと木や森と親しみながら、生きていこうではないか。きっともう少しずつだけでも人には豊かな感性が生まれ、地球環境にとっては持続可能な未来がやってくると信じたい。これが私の木育だ。」

両者の「木育宣言」から、これまでの人と木の関わり方を見つめ直し、木育を通して、豊かな「つながり」と「感性」を育み、持続可能な社会を目指そうとする姿勢が読み取れる。このようにそれぞれが木育に対する姿勢や哲学を固めることで、定義が広く漠然としている木育活動が、自主的な定義で豊かに進めていくことができるようになる。

木育の制度的な枠組みの歴史と日本における課題を示しているのは、山下晃功・原知子に

よる『木育のすすめ』⁶である。山下と原は、木育が国の枠組みの中で、「木材利用に関する教育」として狭い意味で位置づいていることと指摘する。具体的には、木材利用を体験の中で教える木工教室の指導員が不足していること、そして彼らの養成が必要であることを指摘している。

「木材利用に関する教育」から一步踏み出して、森に生えている木が、材として切り出され、加工され、普段の生活の中でどのような姿になっているかを具体的に知ることは、資源と生活を繋げて考える上でとても重要である。木育に繋がる先行研究として極めて重要な文献である西川栄明の『北の木と語る』は、北海道産の12種類の木が、どのような製品になって生活の中に存在しているかを、鮮明な写真と共に紹介している。これは北海道庁が力を入れて取り組んでいる「立ち木と材の関係性」の学習に最適な文献である。この文献を通して、北海道の森の豊かさと生活の中の木製品の成り立ち、加工技術の質の高さを知ることが出来る。多くの政策が指摘するように、森林を守り、林業・木材産業を活性化するためには、長期的な視点と人づくりが不可欠である。その全ての重要性を確認することができるのが本書である。

いずれも木育活動や木製品の成り立ちと事例紹介、あるいは「木材利用に関する教育」という木育の狭い定義における課題については言及しているが、木工産地における取り組みに焦点を絞ったものはみられない。前節で紹介した「北海道森林づくり計画」では「森林づくりの道民の理解と参加」が木育活動を通して推進していることを目標としている以上、木工産地における木育活動がどのように森林保全の推進や市民の理解・認知に対して影響を及ぼし、経済的な効果を生み出しているか、あるいは、木育活動が生活の中で創出する豊かさを模索するという事は、木育活動をより全国に広く普及させるための第一歩として、重要な意義をもつ。

本論文では、現在北海道の木工産地において、どのような取り組みがなされているかを、遊具・食器・家具の三つの視点から調査・分析し、その効果を考察する。

第四節 北海道の木工産地

北海道は良質な材が採れるため、各地で製材業が盛んであった。しかしこれまでの製材を売るスタイルだけでなく、加工することで付加価値を持たせた製品を売り出すことを各地で試行錯誤している。そんな試行錯誤の結果、成功した北海道を代表する木工業の盛んな地域に、旭川市と置戸町、札幌市が挙げられる。

旭川産地の家具製造は、開拓の歴史から始まり、広大な森林から採れる良質な木材によって、製材業が定着した。また家を立てる際に必要な建具や生活必需品である家具、農耕機具の製造が盛んに行われた。そして戦後、婚礼ダンスや棚などのいわゆる「箱モノ」家具の製

⁶ 『木育のすすめ』 山下晃功・原知子著 海青社 2008年3月15日

造で有名になり、産地として確立した。しかしバブル経済の崩壊と造り付け家具の増加によって、机や椅子などの「脚モノ」家具へ転換していった。その際デザインの必要性が生じ、国際家具デザインコンペティションを開催し、現在に至っている。

置戸町は、旭川市同様、良質な木材を作り出す製材業でその基礎を築いた。しかし材から製品を作る加工の技術は蓄積されていなかった。そこから置戸町は社会教育計画の中で、生産教育を打ち出した。そして、工業デザイナーの秋岡芳夫との出会いによって、現在のオケクラフトの原型が生み出された。そして生産教育の一環として木工家を育てる研修制度と施設を作ることで、多くの優れた木工家を輩出している。

札幌市は、高等教育機関が集積し、本州からの北海道の窓口としての役割を持ち、新しいデザインや感性を持つ人々が集まっている。現在では数多くの個人工房や木工デザイナーが活躍している。

次に、デザイナーや木工家の育成ではなく、木育マイスターの育成と木育をキーワードに集まる人々のネットワークである「木育ファミリー」に焦点を当て、木育活動の展開に迫っていく。

第五節 「木育」の展開

(1) 未来の木育を担う人材育成

道庁は今後の木育を担う人材を育成するために、2009年より木育マイスター養成制度を開始し、これまで120名の木育マイスターを輩出してきた。木育マイスター養成制度は、NPO法人ねおすが道庁から委託され、研修を行っている。木育マイスター養成制度では、「木育」の理念を十分に理解し、木育活動の企画立案やコーディネートができる人材育成を目的として行っている。研修のカリキュラムは、①木育の理念、②森づくりの仕事や樹木などの基礎知識、③暮らしと産業の関わり、④人の成長過程における木の存在や癒し効果、⑤木育プログラムにおける伝える技術、⑥木育プログラムの考え方と企画の仕方の6つ分かれている。研修は、札幌と旭川（または北見）を会場とし、各会場で1泊2日の講座を夏と秋の2回行い、研修生は計2泊4日の研修を受け、6つのカリキュラムを受講していく。また夏と秋の講義の間には、木育活動にOJTとして参加することで、研修の知識や経験を活かす。また研修期間の間に行うことで、後半の研修への学習意欲の向上や総合的な理解に繋がっている。

木育マイスターに期待される役割は、イベント開催のコーディネーター役である。イベント運営のための人材を集め、彼らを組織化し、コンセプトを考え、実際にイベントを成功させる指揮官としての役割を担っている。コーディネーターとしての技能を身につけるために、森林や環境に関する基本的な学習や状況に応じたプログラムの作成、スタッフへの指導方法、木育の事例を実習と共に学ぶ。

木育マイスター養成制度の課題は、二つある。一つ目は、参加者の学習意欲を維持するこ

とである。二つ目は、木育マイスターという資格が仕事場や社会的な地位向上に繋がるような仕組みづくりや認知度の向上を図っていくことである。

一つ目ノ問題については、養成制度の参加者の中には、木育マイスターは「森や自然に関する知識をたくさん知っている人だ」という誤解を持った人がいる。そのため養成制度の中で、急にコーディネーターとしての役割を期待され、違和感を感じて、やる気を損ねてしまう人がいるという。そこで、養成制度の参加の前に面接やレポート、試験などを導入して、プログラムに参加する人のやる気を確認し、木育マイスターのイメージのコンセンサスを得ていくことが必要である。また面接等の措置を設けることによって、木育マイスターへの学習の意欲を高める効果も狙う。

二つ目に、木育マイスターの社会的な地位の向上に関して述べる。木育マイスターの資格を取ることによって、木育のイベントやプログラムの運営が可能であることが証明される。その能力を社会で十分に活かすためには、彼らが活動をしやすい環境を整える必要がある。

そのためにはまず、木育マイスターに関する認知度を高めるなくてはならない。一般の人に広く知ってもらい、木育のイベントを開催して欲しいと考えている人と繋がっていく必要がある。これまで以上にイベントが開催され、参加者が増えることによって、その活動の意義を体験してもらい、必要性を実感してもらう。

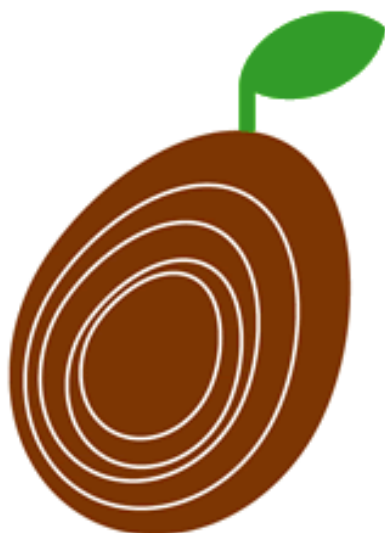
次に、行政や企業が木育マイスターの価値を理解し、評価することが必要である。行政や企業が木育マイスターに対して積極的にイベントを開催することを奨励し、木育や企業の製品についてより知ってもらうことによって、木育マイスターの活動が行政や企業にも良い影響を与え、木育マイスターの活動しやすい環境を整えることができる。

(2)「木育」という旗印 木育ファミリー

平成 16 年に北海道と道民による「木育推進プロジェクトチーム」が設立された。約一年間の委員会の活動によって、木育の基本概念や木育に関する制度が作られた。役目を終えた委員会が解散することになったのを機に、煙山泰子をはじめとしたメンバーが、「これから木育を広めていこうとする時に、木育を推進していく委員会がなくなってしまうのはもったいない」と考え、木育を広める団体として「木育ファミリー」を設立した。

木育ファミリーは、木育活動をしている人たちのネットワークである。志を同じにする人々のネットワークというものは、活動を維持し、発展させていくには、重要である。

また木育ファミリーはネットワークであるとともに、公式ウェブサイトやブログ、メールマガジンを通して、広報活動を行っている。



Mokuiku Family

注) 木育ファミリーHP より

木育マイスター養成制度では、木育イベントのコーディネーターの役割を行う人材を輩出することを目的としていることが明らかになった。また木育ファミリーは、木育活動をする人や興味のある人を繋げることによって、協同してイベントを盛り上げている。これからは、札幌市・旭川市・置戸町で行われている木育活動を遊具・食器（クラフト）・家具の分野に分け紹介する。そしてそれぞれの活動がどのような成功を納め、いかなる課題に直面しているのか、考察を加えて行く。

第六節 調査対象・調査方法

調査地は、北海道の木工産地に定めた。木育という言葉が北海道発信であることから、北海道の木工産地で木育活動が地域や経済効果とどのように結びついているかを調査することには大きな意義がある。木育活動は、道庁によって枠組みや制度が整備されたが、実際の現場では公認団体や NPO 法人などグループや個人が、日々努力を重ねて積極的に取り組んでいることで成り立っている。そこで具体的な調査対象は、「北海道庁水産林務部林業木材課」・「NPO 法人ねおす」・「木育ファミリー」・「KEM 工房」・「旭川市子ども子育て部子ども育成課」・「オケクラフトセンター 森林工芸館」・「旭川家具工業協同組合」・「君の椅子プロジェクト」に絞り、遊具・食器（クラフト）・家具の視点から、それぞれの活動内容と果たしてきた役割を分析する。

「北海道庁水産林務部林業木材課」は、「木育」という言葉や理念を生み出し、木育遊具導入推進事業や木育マイスターの派遣事業を中心に、木育を推進する活動を行っている。

「NPO 法人ねおす」は、自然体験学習をもとにエコツアーを行っている団体である。エコツアーや子どもの自然体験学習、企業向けの研修制度などを実施しており、北海道庁から

の委託事業として、「木育マイスター養成制度」を企画し、実施した。

「木育ファミリー」は、「木育」の普及と推進を行う公認団体である。詳しい取り組みについては前節で紹介した通りである。「KEM 工房」は札幌市にある木製のおもちゃや生活用品のデザインおよび一部製造を行う工房である。「木育ファミリー」と「KEM 工房」ともに代表である煙山泰子氏からお話を伺った。

「旭川市役所子ども子育て部子ども育成課」には、「もりもりパーク」の運営について調査した。子ども育成課の仕事は、主に保育所の整備や新たにできる保育所を認可する業務、その他には、認可保育施設・無認可保育施設の指導監督、旭川市内の公立無認可保育所の管理、市内二カ所にある幼稚園と保育所が一体になった認定子ども園の認可認定も行っている。さらに市内私立に入園している方々の保育料を補助する制度である幼稚園就園奨励の運営も行っている。これに加えて「もりもりパーク」の管理・運営がある。

「オケクラフトセンター」は、置戸町の教育委員会の管轄であり、オケクラフトの担い手となる人材の育成とオケクラフト製品のショップを兼務している。オケクラフトセンターについては、館長の北山雅俊氏をお尋ねした。

「旭川家具工業協同組合」は、組合員の利益に繋がるように、共同展示場事業・共同購買物流・共同受注事業・共同ネットショップ事業を行っている。また旭川に3年に1回行われる国際家具デザインコンペティションの主宰や毎年行われている木工教室や旭川産地展を開催している。

「君の椅子プロジェクト」は、代表の磯田憲一氏に、プロジェクトの経緯とコンセプトを、資料やDVDを見ながら、説明して頂いた。調査の最後には、「君の椅子工学舎」に移動し、実際の「君の椅子」を見ながら、年ごとの椅子のデザインの違いや材質、重さなどを知ることができた。

本論文で調査したオケクラフトセンターと旭川家具工業協同組合では、「木育」を意識して活動を行っているのではなく、行ってきた活動が「木育」に当てはまったという文脈で捉えていた。オケクラフトセンターの「手で考えるワークショップ」と旭川家具工業協同組合の「木工教室」には、それぞれの哲学やコンセプトに則って行われているので、「木育」を押し付けることはできない。しかし、それぞれのコンセプトを尊重すると共に、今後コンセプトと木育が両立して、社会に打ち出されていって欲しいという願いも込めて、本論文では、木育活動の一つとして取り上げている。また活動のコアとして構えているものは違っても、木育活動の一環であり、また木育がそれぞれの活動に良い影響を与えるものであると信じている。

調査は、インタビュー形式で行った。木育活動に従事する人々が木育をどのように捉え、どんな活動をしているのか、インタビュー調査で引き出すことが最も適切であると判断した。

加えて、木育のイベントに参加する一般の人々の声や木製品の利用者の感想については、地方自治体の広報資料やインターネットのブログなども使用した。

第一章 北海道の木工産地と木育

第一節 遊具 木育と地域興し

本節では、北海道庁行っている「木製遊具導入のすすめ」と旭川市の「もりもりパーク」開設を例に、遊具と木育マイスターの相互作用と地域の活性化の展開をみていく

(1) 木育遊具導入のすすめ

北海道庁は、木育を生活に根ざした息の長い活動にするため、親子が共に木のおもちゃに触れ、その親しみやすさや木の良さを体感してもらうために「わくわく！木育ランド」と称して木製の木育遊具と触れ親しむ場を道内各地で開催してきた。また木育に関する講座やメールマガジンなどによる木育活動の情報発信も行ってきた。

「木育ファミリー」などの民間団体の諸活動や木育遊具を設置した木育関連施設の整備が進んできたのを機に、さらに木に親しむ環境を充実させるため、道庁では平成 21 年度に「まちじゅう木育プロジェクト」を開始した。

プロジェクトでは、「木育遊具」に着目し、公共施設や幼稚園、保育所などの教育・子育て施設、スーパーなどの民間施設に木育遊具の導入を目的として、課題や方策について検討を重ねた。

まず、札幌市内の幼稚園・保育所（6カ所）と大型スーパー（4カ所）に1～2週間設置し、子どもたちに実際に遊びを体験すると同時に保護者と設置施設の管理者にそれぞれアンケート調査を行った。その調査結果から保護者と管理者の考え方を分析し、課題と方策を検討した。

設置した遊具は、木馬（2種類）・木のプール・輪投げ・ブロック・手押し車・引き車で、全て木製である。この中で一番人気があったのは、木のプールである。使用した感想は、「温かみがある」「触りご心地がいい」「においがいい」「音がいい」「重みがある」「色が良い」と木の特性が十分に伝えわっていることが解る。

木育遊具普及への課題は、「木育遊具が高い」「安全・衛生管理に関する情報がさらに必要」「設置スペースが必要」「木育遊具の種類や特性に関する情報が必要」などが挙げられた。これらの課題では、特にレンタルの希望と木育遊具の情報の必要性が多かったため、木育遊具の検索が出来る木育遊具パッケージシステムを作成し、CD-ROM で幼稚園・保育園・子育て関係施設等に配布した。

現在では、レンタルのニーズに応えるために、「木育活動普及促進事業」を実施し、木育活動の現場に木育マイスターと木育遊具を派遣することによって、継続的な木育活動を実施している。また木育遊具の導入を考えている場所には、その場のニーズや特性に合わせた木育遊具を提案している。

次章で詳しく紹介する木育マイスターの萩原寛暢氏は、この事業を積極的に利用し、公共施設のスペースを活用して、木育遊具を設置し、木育活動を行っている。木育遊具への評価

は良く、来年度も同様のイベントを実施する予定でいる。これは、木育遊具と木育マイスターが有機的な関係性を築けている例であり、今後も両者の関係が多くのイベントを生み出していこう。

(2) 街に活気を もりもりパーク

旭川市は、北海道内で札幌市の次に人口が多い市町村である。従って子どもも多く、子育て世帯にとっては、子どもを安全に遊ばせることが出来る場所は、とても重要である。しかし北海道の野外遊具の多くは鉄製であり、冬の間は冷たすぎて容易に遊ぶことができない。さらに長引く不景気の中、大手百貨店が閉店し、集客効果が無く中心市街地は活気を失いつつあった。

旭川駅から徒歩5分の位置にあるフィール旭川の6階には、冬でも安心して子どもを遊ばせることの出来る木製遊具施設「もりもりパーク」⁷がある。かつて大手百貨店があったこの場所で、子育て支援と街の活性化を狙う取り組みが始まった。またもりもりパークは、木工産地が産学官で連携し、木製遊具で子ども達が安心して遊ぶ場を整え、中心市街地への集客に成功した例として挙げられる。

もりもりパークは、旭川市子育て支援部子ども育成課が管理・運営している。もりもりパークには、「森の中の冒険遊び」をコンセプトに、大小10個の遊具が設置されている。その殆どが木製遊具であり、大型の遊具は旭川大学がデザインし、旭川の家具会社が製造している。フロアは、体を使って思いっきり遊ぶ「わんぱく広場」と木の温もりや触り心地を感じながら遊ぶ「もくもく広場」、そして0～2歳児が安心して遊べる「ひだまり広場」の三つのゾーンに分かれており、子ども達は発育具合や遊びに合わせて、楽しく遊ぶことができる。また木のベンチや椅子がたくさん設けられているため、保護者もゆっくりと子ども達と遊んだり休憩することができるようになっている。

もりもりパークは今年で2年目を迎え、1年目は利用者15万人を達成した。また周辺施設や旭川家具工業共同組合と協力し、駐車場の利用料サービスや木製遊具・家具を導入し、産地としての独自性を打ち出していった。利用者の多くが満足しており、日々リピーターも増えている。

⁷ 平成23年1月24日に企画が起こり、3回にわたる会議の中で、コンセプトの作成や基本事項のとりまとめが行われた。その後、平成23年7月7日に木製遊具設計の会議が行われ、調査・製造・試運転を経て、平成23年9月15日にオープンした。



注) もりもりパーク HP より

第二節 食器・クラフト -人を育てる-

この節では、食器やクラフトワークを作るデザイナーと産地の取り組みを紹介する。

KEM 工房の製品は、子どもから大人まで楽しめる工夫が数多く施されている。KEM 製品に触れることによって、豊かな感性や木の大切さを学ぶきっかけになっている。

置戸町では、過疎化が進む町において、打開策として生産教育のもとで人材育成を行ってきた。そして人を育てることと製品を通して、人々に置戸町の思想を発信している。

(1) 子どもたちとかつて子どもだった人への贈り物 KEM 工房

KEM 工房は、1979 年にデザイナー煙山泰子氏が開設した個人工房である。サン・テグジュペリの『星の王子様』に由来する「子どもたちとかつて子どもだった人への贈り物」をコンセプトに、木製の遊具や生活用品を手がけている。

煙山氏は、工房開設から 3 年後、野菜の形を木で作った「KEM ベジタブル」でデザインフォーラム '81 の金賞に輝き、一躍有名になり名実共にデザイナーとしての地位を築いた。その後、ものづくりの品質にこだわり、津別町木材工芸協同組合とコラボレーションし、鳥や動物、卵、花など可愛らしいデザインで、木のぬくもりを感じる遊具や生活用品、ツールを創り出していった。さらに、図書館や遊び場などの子どもたちの空間のデザインや学校や公共施設のレリーフのデザインも手がけている。

KEM 工房の製品である「木育の玉手箱」は、木育体感講座などの講習会やワークショッ

プで教材として使われている。「玉手箱」には、①エゾマツ・イチイ・ミズナラ・セン・サクラの五種類の板と②降ると木がぶつかり合い音の鳴る「カタカタ」がエゾマツ・ミズナラの2種類、③樹脂製ルーペ（10倍）が1つ、④イチイ（針葉樹）・サクラ（広葉樹）の輪切り材が各1種類、⑤松ボックリ（針葉樹）・クルミ（広葉樹）の木の種子が数個、計5品が入っている。玉手箱の製品を用いることで、木の特性の違いを、触って、聞いて、嗅いで、見て、身体感覚を通して実感することが出来る。

「木育の玉手箱」とは別に、鳥のタマゴの形をした木製品の「森の鳥達からの贈り物 木のタマゴ」がある。これは、北海道産の10種類の木（エゾマツ・ナラ・ニレ・イチイ・エンジュ・セン・ホオ・キハダ・クルミ・サクラ）から作られている。タマゴの形をしたシンプルな製品ではあるが、10種類の製品を比べることで木の特性が伝わってくる。触り心地や音の違い、匂いや木目など驚くほど多くの情報が感覚を通して飛び込んでくる。「木のタマゴ」は、NPO 法人日本グッド・トイ委員会が良質な遊具を認定する「グッド・トイ認定おもちゃ」にも選ばれている。また「木育ファミリー」の会員には会員証として「木のタマゴ」が一つ贈られる。「木のタマゴ」が木育のシンボルにもなり、木育活動を行う人々のつなぎ目としての役割も担っている。

（2）人を育てる産地の挑戦 オケクラフトセンター

置戸町は、大雪山の東側に位置して、良質なエゾマツとトドマツが群生していたため製材業で栄えていたが、戦後過疎化の波が襲い、町の産業は衰退していった。そこで、町の再生のために製品を作り出す人材を育成する生産教育を打ち出した。しかし、木材を加工する技術が蓄積してこなかった置戸町は、製品化の壁に直面した。その状況を打開するために、雪と木と共生する北欧を視察した。北欧視察で、生活の中に木を取り入れる文化を学んだ後に、工業デザイナー秋岡芳夫との出会いにより、「オケクラフト」が誕生した。

秋岡芳夫は、置戸町に「北国から新しい暮らしの文化を発信する」ことをコンセプトとし、木の食器やクラフトワークの製作を提案した。活動当初は、売り物ではなく自分たちの暮らしを楽しむために創作されていたが、秋岡芳夫のプロデュースの下で、東京の高島屋で展示会を開催し大きな反響を呼んだ。これが転機となり、オケクラフトの本格的な製品化と生産者の育成に力を入れ、現在のオケクラフトセンターの前身である開発センターと研修制度が作られた。

現在オケクラフトセンターでは、生産者の2年間の研修所としての役割の他に、オケクラフトのショップやオケクラフト全体の修理や取り扱い方法などの問い合わせの窓口、ワークショップの企画・運営を行っている。

オケクラフトは学校給食の場で活用することによって、子ども達への食育と木育が相互作用をもたらしている。学校給食に利用されることで、オケクラフトの良質なデザインが料理の引き立て役になることはもちろんのこと、木製品の肌触りや口当たりの良さが子ども達の

食欲を掻き立て、置戸町の給食は、「日本一美味しい給食」と称されるまでになった。またオケクラフトは、子ども達の食欲を生み出すだけでなく、木製品との付き合い方を生活の中で教えてきた。アルミ製やプラスチック製の食器とは異なり、木製の食器は落としたりすると壊れやすい。そのため子ども達は日々の学校生活の中で、「乱暴に扱えば壊れること」・「モノを大切に扱うこと」・「壊れたものは修理して永く使うこと」を体感することができる。このような体験の場を支えるために、オケクラフトセンターでは学校と「食器を投げて壊した場合は、子どもを叱る。しかし、わざとじゃなく落としてしまった場合は、叱らない。」という取り決めや学校の長期休みの間に食器やカトラリーを修理する体制を設けている。

オケクラフトの使用者は、製品の親しみのもてる洗練されたデザイン性ととも、木の温もりや触り心地、口当たりの良さを評価している。またオケクラフトセンターでは3日1個の頻度で壊れた製品が届き、修理して持ち主に送り返している。このことから、利用者がオケクラフトを永く使いたいという想いが読み取れる。

置戸町は、「消費者から愛用者へ」・「良いモノ永く使う」という秋岡芳夫の思想を引き継ぎ、生産者や置戸町の子ども、そして愛用者を、オケクラフトを通じて育てている。



注) オケクラフトセンターHP より 「ショップエリア」

第三節 家具 -地域との繋がり創造-

低迷の一途を辿っている家具産業において、旭川家具工業組合と「君の椅子プロジェクト」は希望の光といえる。前者は、地域ブランディングとデザイン指向に転換し、IFDA や木工キャンプなどの国内外の交流を積極的に行い、世界的な注目を集めている。後者は、旭川家具産地と周辺の地方自治体がコラボレーションし、生まれてくる子ども達に椅子という「居場所」を贈り届けている。これは、子どもの椅子の発展の限界を越える活動でもある。

二つの活動を通して、産地と地域の豊かな関係性を探っていく。

(1) 産地の繁栄を目指して 旭川家具工業共同組合

旭川産地は、「旭川家具」としてブランディングを図り、産地の繁栄を目指している。そして国際家具デザインフェアを開催し、家具業界では世界に注目される産地として名を轟かせている。しかしここまでの道のりは、簡単ではなかった。

婚礼箆笥や棚などの箱モノ家具を中心に 1950～60 年代から出荷量を増やし、成長した旭川家具産地であったが、バブル経済以降の売り上げの低迷によって、多くの会社や工場が倒産に追い込まれた。またハウスメーカーの家具やクローゼットの販売によって、箆笥の需要が急激に落ち込んだ。

その状況を打開するために、箱モノ家具から椅子やテーブルなどの脚モノ家具への転換を図った。その際、デザインの重要性に気付いた。そしてデザインの質と価値を上げ、商品の価値を上げていく試みが行われた。その一環が、国際家具デザインフェアである IFDA (International Furniture Design fair Asahikawa) である。

IFDA は 3 年に 1 度開催され、10 回の開催を目標に取り組まれている。このイベントでは、世界中から家具デザインのコンペを行い、世界中の優れた頭脳と産地が結びつき、デザインを吸収することを目的としている。

旭川市の開基 100 周年の年に第一回目を開催し、現在では第 8 回目が昨年開催された。デザインの応募件数だけでも 6000～7000 点以上にのぼっている。またそこで生まれた優れたデザインについては、商品化し国内外での売り上げ実績も上げ、産地としての価値を高めている。

IFDA を通して旭川の産地の知名度は、家具業界の中では高まっているが、一般の人や特に道内の人たちのその認識は低い。これまで購買者の多くが本州の人たちであったために、道内での広報活動が手薄になっていた。

そこで旭川では、多くの一般市民に知って、触れて、愛されるために、一年に二回セールイベントを開催している。また 6 月には旭川産地展を開催し、一般の人々との繋がりをつくっている。

一般市民の参加型のイベントとしては、9 月に木工教室を開催している。木工教室では、指導検定を持っている職人に指導して頂き、本格的な家具作りを楽しめるイベントを行っている。開催当初は、子ども向けに展開していたが、大人の方が真剣に取り組み、楽しんでくれるということで、今では大人向けの企画になっている。製作する家具は、車で乗せて帰れるサイズのモノとして木の巣箱とベンチ製作のふたつを提供している。

大工のように金槌や釘を使うことは、家具作りにはない。イベントでも木工キットを使って釘を使用せずに、「仕事」になるような本格的な木工教室を開いている。

木工教室やセールイベントとは趣がことなるが、旭川市民は公共施設の中で、旭川家具に触れている。リニューアルした旭川駅にある家具や前の節で取り上げた「もりもりパーク」の木製遊具、学校や情報センターなどにも旭川家具が設置されている。旭川家具工業共同組

合としては、これからも色々な場所で地域と市民の人々との結びつきを強くし、産地の繁栄と暮らしの豊かさの両方を実現していくことを目指している。

(2) 居場所を届ける 君の椅子プロジェクト

旭川大学の磯田憲一講師のゼミで、生まれてきた子ども達に「居場所」を届けるプロジェクトが生まれた。

旭川は日本を代表する家具産地の一つである。その発展の歴史は明治政府の開拓とともに始まり、高度経済成長・バブル経済と成長を続けた。しかしバブル経済崩壊以降、不景気の中で家具産業は衰退し、多くの会社が倒産した。その状況を打開するために、婚礼箆笥や棚などの「箱モノ家具」から、テーブルや椅子などの「脚モノ家具」に、シフトチェンジを図り、デザイン性を高めるために国際家具デザインコンペティションを開催し、家具産地の復興を目指した。そんな中、産地を支える職人の技術に敬意を評し、地域の宝である子ども達に「居場所」を届けるために、椅子を贈る「君の椅子プロジェクト」が生まれた。生まれてくる子どもに産地で製作した椅子をプレゼントすることで、産地の経済効果と地域に子ども達の居場所を創出することを目指した。子どもとその家族は、椅子を贈られると同時に、その椅子と生活することで、旭川家具の技術の確かさや木製品の特徴に触れることも出来る。

このプロジェクトには、北海道の東川町・剣淵町・愛別町が参加している。さらに現在では、自治体の参加だけでなく、個人も「君の椅子倶楽部」の会員になることで会員費と引き換えに「君の椅子」を受け取ることができる。このプロジェクトは、東日本大震災が発生した2011年3月11日誕生した乳児104人にも「希望の『君の椅子』」を届けてきた。

「君の椅子」は毎年デザインが新しくなり、それぞれのデザイナーの工夫やコンセプトを実感できる。また子どもの椅子としての機能は5歳児ぐらいまでが限界であるが、靴を履く際の腰掛け椅子や高い場所にあるモノをとる際の台としての役割を担うことを想定して、頑強に作られている。さらにプロジェクトでは、椅子としての機能とともに、木製の椅子に愛着を持つことや居場所をプレゼントされたことを知らせる「思い出の想起」機能が伴っていると考えている。

参加自治体では、出産を迎えた母親には周知のものとなり、今後出産予定の母親たちも、今年の椅子のデザインがどのようなものなのか話題になっている。また「君の椅子」が一つの後押しとなり、出産を前向きに考える家族や移り住んでくる家族もいる。「君の椅子」と「出産に踏み切った理由」がどれほど相関関係にあるかは解らないが、出産を迎える家族の楽しみになっており、「子どもを大切に作る町」というイメージは徐々に形成されつつある。さらに、写真でもって地域興しを進める東川町では、「君の椅子」を持つ子ども達とその家族の写真展を行っており、文化として定着し始めているといえる。

「君の椅子プロジェクト」は、子ども達への居場所の創出というコンセプト的な取り組みに収まらず、産地の経済的な作用をもたらす取り組みにまで発展している。



注) 旭川大学 HP 「君の椅子」プロジェクト より

第二章 木育活動の意義

第一節 木育活動の分析

これまで紹介してきた木育活動を以下の表 2 にまとめた。

表 2

活動名	概要	団体	長所	短所
木育マイスター養成制度	木育マイスターの養成	北海道庁	<ul style="list-style-type: none"> ・ 次世代の木育を担う人材を育成出来る。 ・ 資格があることで、対外的に理解されやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 木育マイスターの誤解 ・ 木育マイスターが行うイベントが一過性のものに成りやすい
木育ファミリー	木育のネットワーク化と広報活動	公認団体「木育ファミリー」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 木育がネットワーク化できる。 ・ 広報活動が行える。 	
木製遊具導入	木製遊具導入の推進	北海道庁	<ul style="list-style-type: none"> ・ 木の良さを感じてもらえる。 ・ 木育イベントが行いやすくなる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 木製遊具が高価 ・ ものによっては場所と安全確保が必要
もりもりパーク	子育て支援遊びの創造 経済活性化	旭川市子ども子育て部子ども育成課	<ul style="list-style-type: none"> ・ 木製遊具作成時の産地との連携 ・ 利用料無料 ・ 経済活性化 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 維持費やリニューアルなどの費用がかかる ・ 移動が不便

KEM 工房	<ul style="list-style-type: none"> 木製の遊具や生活用品の製作 子どもの空間のデザイン 	株式会社「KEM 工房」	<ul style="list-style-type: none"> 木製遊具の質の良さを発信 遊びや子どもが集まる場の創造 産地との連携 	
オケクラフト研修制度	<ul style="list-style-type: none"> オケクラフト製作の人材育成 	オケクラフトセンター	<ul style="list-style-type: none"> オケクラフトの担い手の創出 オケクラフトのショップ 食育との連携 町のネームバリューが上がる 	<ul style="list-style-type: none"> 工芸作家の経済的維持 担い手を村に定着させることが困難
旭川家具工業協同組合の諸活動	<p>IFDA 木工教室</p> <ul style="list-style-type: none"> 家具の販売 	旭川家具工業協同組合	<ul style="list-style-type: none"> 国内外の家具業界への告知 デザインの吸収 産地の活性化 一般への告知と参加型の活動を通して、認知度が高まる。 	<ul style="list-style-type: none"> 一般の人の認知度が低い イベントの参加と購買の関係が不明瞭
君の椅子プロジェクト	<ul style="list-style-type: none"> 君の椅子を乳児に届ける 	公認団体「君の椅子プロジェクト」 (東川町・剣淵町・愛別町)	<ul style="list-style-type: none"> 地域貢献 子育てや出産の後押しと地域のイメージアップ 子どもの椅子の新しい形 経済の活性化 	資金不足

この表から解るように、木育活動の長所は「人材育成」「経済の活性化」「広報活動」の三つに大別できる。

(1) 人材育成

「人材育成」は、木育の担い手を育成するものと木製品の作り手を創造するものの二つがある。企業活動や学校教育の中での、人材育成とは違い、各地方自治体の思想が繁栄された

人材育成になっている。木育マイスター養成制度は、北海道庁が発信し、推奨している木育の担い手となる人材を育成し、置戸町は、「北の国から新しい生活を提案する」人材を育成し、各地域に還元している。しかし、両者ともに経済効果との結びつきが課題になる。木育マイスターを取得しても、ドイツなどのマイスター制度の様に、社会的な尊敬や給与の増加には繋がらない。もともとの労働構造が違うことが大きな原因ではあるが、木育活動がマイスターのライフワークや一過性のイベントに収斂しないような社会的なテコ入れが今後必要である。また置戸町の研修制動を修了して、木工作家となったとしても、他の木工作家と同様、経済的に厳しい状況が続いてしまう。これは日本の家具工業にも共通の問題であるが、市場が冷えきっているため、そこで働く人々の生活は厳しい。生活が厳しいままでは、それを受け継ぐ人材は現れにくくなり、技術がなくなる危機も生じる。

(2) 経済の活性化

「経済の活性化」に繋がる活動には、「もりもりパーク」と「旭川家具協同組合」が挙げられる。「もりもりパーク」は設立の狙い通り、年間15万人以上のファミリー層の呼び込みに成功している。また家の中にこもりがちな子ども達に、身体を動かす遊びを提供しており、多くの児童と一緒に遊ぶことから、社会性や達成感を得ることに寄与している。「旭川家具協同組合」は、IFDAや木工教室・家具販売を行うことによって、地域のブランド価値を上げ、国内外への認知度を高めると共に、地域の人々と繋がっていくことによって、本州のみならず北海道民への購買を促進している。これまで本州に購買者が多かったために、北海道内への広報活動が手薄になっていた。しかし地域をあげた国際家具デザインフェアを行うことで、北海道内の人へ広報しやすくなった。また年二回木工教室や家具完売を大規模に行うことで、木製家具をより身近に感じてもらえるようになるともに、「旭川＝家具産地」としての市民の認知も高める効果がある。

産地としてのブランディングや経済の活性化に寄与しているものの、不景気の波や資金運用は、両団体とも課題として残る。もりもりパークは、現在利用料を無料にしているため、賃貸料や運営料、整備費用など多額の必要経費を市が負担している。2年目に入り、利用者にも少しずつ飽きがみられるようになってきている。木育や子育てのイベントを開催してはいるが、駐車場が無いことやもの珍しさがなくなったことは否めない。打開するために、リニューアルを行う必要性を理解しているが、経済的に難しい。利用料を取ると、利用者には駐車場代と利用料のふたつがかかってしまい、客足が遠のく可能性がある。リニューアルと利用料、二つの間で揺れ動いている状況である。

旭川家具協同組合の活動は、他の産地の諸活動についても同様であるように木工教室やワークショップを実施することが、直接家具の購買に結びつくのはとても難しい。大量で安価な商品が出回っている世の中で、高額な家具を買ってもらうには、壁がいくつも存在する。旭川の家具は高額ではあるが、品質は良く、修理をすれば長く利用でき、さらにデザイン性

や経年変化などを楽しむことが出来る。「良いものを長く使う」生活スタイルを根付かせるために、木工教室やワークショップなどの一過性の体験をさらに発展させ、正しい知識や生活スタイルを発信していく必要がある。

(3) 広報活動

「木育ファミリー」や「木製遊具導入のすすめ」、「KEM 工房」の活動は、木の良さを発信する「広報活動」にあたる。

「木育ファミリー」の活動の目的の一つは、広報活動である。木育と木育のイベントの告知をインターネットやメールマガジンなどを通して発信している。木育ファミリーのメールマガジンを受け取ると、道内各地で木育活動が活発に行われていることがよく解る。特に札幌はもちろんのこと、旭川周辺や函館周辺、オホーツクでのイベントが毎週のように各地で開催されている。また WEB 上では、イベントの告知とイベントの様子や感想などがブログ形式で紹介されている。メールマガジンとインターネットを通じて、週末の息抜きや家族とのちょっとしたドライブに活用することができる。

次に「木製遊具導入のすすめ」では、子育て施設や大型スーパーなどに木製遊具の導入をすすめると同時に、木育マイスターを派遣し、木育イベントの開催を促している。木製遊具のメリットは、モニタリング調査で確認されており、費用や場所を確保することができれば、子育てやファミリー層の集客に力を発揮する。さらに木製遊具を皮切りに、木育マイスターによる木育講座やワークショップを展開することで、さらに木の良さや総合的な学習を発信していくことが可能になっている。これまで多くのイベントが開催されており、ファミリー層の木育の認知度や参加率は高い。木製遊具と木育マイスターがとても有機的な関係性を築き、相互的に良い効果を見いだしている。

最後に、「KEM 工房」の木製遊具の販売である。KEM 工房では、子どもから大人まで人気のある木製遊具や生活用品を販売している。同じデザインでも木の素材を替えることで、木の質感や音、触りご心地を実感し、遊びを楽しむと同時に、木の特性の違いを学ぶことができるようにしている。経済活動の一環としては、知ってもらうことや買ってもらうことは至極当然のことではあるが、知ること買うことの先に、多くの学びやメッセージが込められている。購買者の多くは、ただモノを買うのではなく、KEM 工房の製品を買うことを通じて、その学びやメッセージを受け取っているように見受けられる。そして何よりも、喜んでいるのは、KEM 工房の製品を受け取った子ども達である。

「広報活動」の課題は、インターネットへの掲載を活発に行うことと広報のデザインの質を高めることである。広報を行うメディアは、テレビ・新聞・雑誌・ラジオ・ポスター・公共施設の広告・インターネットなど多数存在する。その中でも、現在世界中で発達し続けているインターネットに注目したい。インターネットは、実際にモノとして存在する新聞や雑誌、ポスターなどの紙媒体の存在感は無いが、インターネット上には情報を発信する手段と

それを見る可能性のある人は、膨大に存在する。テレビや新聞、雑誌、ラジオの情報はもちろんのこと、SNS や動画配信サイト、共有機能などの普及速度とその効果は計り知れない。既存のメディアがやっていた情報発信を個々人が行うことが出来、さらに旧知の知り合い同士のネットワーク上で目を通してもらえるため、共感を得る人々に繋がりやすい。また多くのマスメディアが一方向的な情報発信に留まっていたのに対して、相互間のやり取りが可能になっているので、情報の受け手とのやり取り次第では、人の温もりや臨機応変な情報を発信することが可能になっている。現在、世界中でインターネットの成功例が提示され、今なお研究が進み、インターネットビジネスへの投資や経済効果は留まることをしらない。これからの時代の中で、効果的によりよく木育のことを知ってもらうには、インターネットを利用した広報活動は必須である。

しかしインターネットで情報発信が手軽だからといって、単純に行ってはいけない。注意しなければならないのは、情報発信のデザインの質である。IFDA では、家具のデザインを求める以上、情報の発信媒体やイベントのデザイン性も高めていかなければならないという考えのもと、WEB サイトや雑誌ではプロのデザイナーに手がけてもらっている。この例が示すように木育の情報発信を行う上でも、デザインの質を向上させなければならない。インターネットをよく利用する人々は、毎日多くのWEB サイトを行き来する間に、それらのデザイン性の質の高さを瞬時に判断する基準をそれぞれ身に付けている。特に若い利用者は、デザインに対する感性がよく、WEB サイトを一見しただけで、そこにある情報を見る価値があるか取捨選択している。デザインが彼らの目に留まる水準でなければ、情報を見てももらえない。またデザインは流行の形や色彩、見やすい構造だけに留まらない。データ通信の早さやWEB サイトの使い易さ、検索した際に上位にヒットするかなど、細かなシステム面でのチェックも怠ってはいけない。次世代の人たちに向けて発信していく以上、彼らの求める水準のものを提示することが課題といえる。

「人材育成」・「経済活性化」・「広報活動」の三つの視点で、これまでの活動を分析し、課題を示してきた。それぞれの活動がひとつひとつ果たす役割があり、志を同じくする人々の間でネットワークが組まれている。しかしそれらは現時点では、一過性の活動の集合体に過ぎず、総合的な学びや広い認知には繋がっていない。今後課題を一步ずつクリアし、木育活動が広く知れ渡り、参加者が増えていくことによって、木育の思想が根付いていって欲しい。

第二節 新しい木育活動の展開

これまで遊具・食器・家具の分野で行われている木育活動に注目してきた。これからは、木育イベントに参加してきた子ども達が、学校教育の現場で木育を学ぶことができる新しい木育の形を紹介する。

「北海道森林づくり基本計画」で指摘している通り、木育を学校教育に取り組んでいく必要性があったが、木育の指導体系や指導者の不足によって、中々その取り組みは進んでこなかった。そこで、地域の学校教育と結びつき、知識と体験を結ぶ総合的な学習を展開している活動を紹介する。

(1) 教育の現場へ デザイナー煙山泰子の挑戦

道庁は「北海道森林づくり基本計画」で、「木育」の学校教育への参入を推進していた。しかし「木育」が学校教育に取り入れられている例は、多くない。そんな中、いち早く「木育授業」を行ったのが、前章でも取り上げたデザイナー兼木育マイスター講師の煙山泰子氏である。

煙山氏は、平成 21 年度から「学校への芸術家等派遣事業」の一環として津別小学校の 3 年生と 5 年生に対して、「木育授業」を行っている。授業の内容は、森に出かけて採った葉っぱを用いたこすり描きや「木の玉手箱」を用いた木の特性体験などである。

学校教育の現場で、木育の授業が展開されることには、大きな意義がある。これまでのワークショップやイベントの在り方では、一過性のものに成りがちだが、学校教育の中に組み込むことによって、継続した木育の学びが期待できる。また木工教室や技術の時間で木の製品を作る体験を得ることが出来ても、そこから「立ち木と材の関係」や「材のそれぞれの特性」、「社会問題との連関性」など総合的な学びを得るのは難しい。しかし木育マイスターが学校教育の現場で、木育の授業を行うことで、科目別の教育カリキュラムの垣根を越えた総合的な学習をコーディネートすることができる。

また、木育の成果は、木の生長と同様に長いスパンで、考えて行かなければならず、その効果も即時的には発揮しにくい。そこで、学校教育の段階から、木育の授業を受けることで、総合的な知識と実習を行い、木のぬくもりや感触、特性の違いなどを感覚で学ぶことができ、豊かな経験が子ども達の自然との付き合い方を促すことになる。

(2) 地域を知る手法としての「木育」

木や森、材や環境のことを知ることに留まらず、木や森を入り口にして、地域のことを学習する取り組みが学校教育の現場で行われている。これまでの活動は「木育」という言葉のイメージ通り、木や森に関する学習または体験に留まっていた。木育活動が自身の言葉のイメージから開放され、市民に「木育」がもつ多様な関係性を実感してもらうためには、何よりも活動それ自体が多くの関係性を持たなければならない。そんな活動の一つに木育マ

イスターの萩原寛暢氏が行う「ふるさと学習」がある。

萩原氏は、これまで美留和小学校・奥春別小学校・和琴小学校での木育授業や PTA のレクリエーションなど学校の教育現場での活動を行ってきた。地域に木育遊具で遊ぶ機械を作り、奥春別小学校での活動を木育マイスターの OJT の場に活用するなど、地域の繋がりや資源を引き出し続けてきた。その中で木育の新しい捉え方として、小学校での「ふるさと学習」が挙げられる。この授業では、郷土史を読み解くためのツールとして「木育」を位置づけてきた。具体的には、弟子屈町の林業の歴史と当時の道具などの説明を、林業に携わっていた方に聞き、子ども達は自分の住むふるさとを深く知るきっかけをつくった。さらにここでは、自分で子ども達に説明するのではなく、町の施設とそこで働く専門家の方に説明してもらうことで、より詳しくリアルで、多くの人を巻き込む活動に昇華させている。

この萩原氏の活動は、木育が学校教育に組み込む上での一つのモデルケースである。またこれまでの木育から一歩踏み込み、木育をツールに郷土史を紐解くという新しい木育の在り方を提示している。

煙山氏・萩原氏の両者の活動から、学校教育の現場で木育を学ぶことができることが分かった。今後は、普遍性を持ったプログラムを考え、木育をパッケージ化していくで、学校教育によりスムーズに受け入れられ、積極的にアピールする道具と成りうる。

第三節 つながりやを創出する木育活動

木育活動が三つの役割を果たしているのに加えて、「木とのつながり」・「知識とのつながり」・「生活とのつながり」の三つのつながりを創出してきた。

「木とのつながり」は、木や木製品に触れることによって得る感覚的な学びである。例えば、家の中にある木製品を使うことで、石油化学製品や鉄、硝子の製品との手触りや口当たりの違いを感じる。また家を出て、森の中を散策し、木に触れ、木の匂いを嗅ぎ、木を折り、木を燃やすことで、五感を刺激する。感覚的な学びから木の特性や質感を実感するなど、木に関する学びの間口は限りなく広い。

「知識とのつながり」は、木や森林、環境についての関心を深め、知恵や知識を深めることである。「木とのつながり」で挙げたような感覚的な経験を入り口に、木や森に関する知識や環境保全の必要性、持続可能な社会を目指すことなどの学習を深めることが出来る。

「生活とのつながり」は、自身の生活と木や森、環境との関係性をどのように構築していくか考え行動する営みである。木育を通して、感覚的な学びと知識の習得の相互作用を繰り返す、人々は自身の生活スタイルや生き方を見つめ直すことになる。そんな時、自分が向かうべき方向性を示すのが、木育マイスターであったり、木育のネットワークや尊敬する職人であったりする。彼らをモデルロールにして、生活を見直し、自分自身の納得のいく生活を再構築していく。

木育の創出する豊かさは、この三つのつながりにこそある。木と知識と人との繋がりが人々の生活に活力と生きがいを生み出し、納得のいく生活を再構築することに喜びが生まれる。木育には、人々の生活を豊かにし、持続可能な社会を築く可能性を秘めている。

しかし、3つのつながりが有機的に循環するには、多くのプログラムに参加者が積極的に取り組んだ場合にのみ可能である。現在の木育活動は体系的に結びついているわけではない。活動者のネットワークや協同のシステムは存在しているが、その内容同士の総合的な学習の枠組みや道筋は成り立っていない。週末に行われるイベントや一定期間のフェアなどでは、特集的にある分野に特化した情報発信は出来ても、参加者の総合的な学習まで構成することは出来ない。そこで、学校教育の中に木育を位置づける必要性がみえてくる。学校教育では、次世代を担う子ども達に一定の時間をかけて、総合的な学習を行う場を生み出すことができる。今後はこれまでの活動を整理し、学校教育の場で長期間行えるように、体系立った総合的な学びの内容と枠組みを詰めていく必要がある。

終章 おわりに

本稿の課題は、北海道の木工産地で行われている木育活動を、遊具・食器（クラフト）・家具の分野から分析することである。そこで明らかにされたことは、各地で行われている木育活動が、産地へ経済的な効果をもたらし、木と森と人がつながることが生活を豊かにする可能性を秘めていることである。

木育は、自然と人と知と繋がるツールである。人々は木育を通して、木の存在を生活に取り込んでいく。また林業や木工業の雇用の創出や技術の継承など経済的な効果も今後期待できる。しかし、確かな技術によって裏付けされた木製品は、高価で中々購入することが難しい。一旦購入してしまえば、修理することで永く愛用することが可能だが、消費文化の生活スタイルはまだ根強く、目先の安い製品を手にとってしまう。そんな生活スタイルを改善し、購入してもらうためには、多くの人に使用してもらう必要がある。そこで、置戸町の給食や旭川駅のベンチなどに代表される公共の場での使用が大きな意義を持つてくる。高価で多くの人が購入できない木製品を、公共の場で使用することで、多くの人が「モノ」と「技術」に触れることができる。また素晴らしい木製品の魅力は、そのモノだけに留まらない。空間や料理なども木製品によって彩られることによって、その魅力を十二分に引き出され、それらに触れる人々の心を掴んで離さない。子ども達は地域や家庭に居場所を見つけ、食べ物や飲み物を好きになり、木の椅子の上で心も身体も心地よい時間を堪能できる。そして「好きになった」先に、「大切にすること」や「修理して永く使うこと」、「愛着を持つこと」など、消費文化が見失ってきた在り方を見直すことが出来る。北海道での木育は、地方自治体や地域、地場産業との結びつきが強い。そのためコミュニティの利点を生かして、公共の場に「木」を取り入れ、多くの人が愛着を持てる環境を整えることが出来る。木育活動のもつ「つながり」の力を、人や産地が発揮させることによって、産地の繁栄、生活の豊かさと自

然との共存が保たれる持続可能な社会がみえてくる。

参考文献

- 旭川市市民生活部広報広聴課広報係、2012年9月15日、「平成24年 あさひばし 9月号」
旭川市市民生活部広報広聴課広報係
オケクラフト10周年記念事業実行委員会、1994年3月31日、「オケクラフトの10年-オケクラフト10周年記念誌」オケクラフト10周年記念事業実行委員会
オケクラフト20周年記念事業実行委員会、2004年3月31日、「11年から20年への歩み-オケクラフト20周年記念誌-」オケクラフト20周年記念事業実行委員会
織田憲嗣、2002年10月25日、「ハンスウェグナーの椅子100」、平凡社
木村光夫、1999年3月25日、「旭川木材産業工芸発達史」、旭川家具工業協同組合
糸野博行、2010年3月30日、「産地の変貌と人的ネットワーク-旭川家具産地の挑戦」、御茶の水書房
煙山泰子・西川栄明、2008年10月、「木育の本 木とふれあい、木に学び、木と生きる」、北海道新聞社
島崎信+生活デザインミュージアム、2003年12月20日、「美しい椅子-北欧4人の名匠デザイン」、榎出版
森林総合研究所、2012年3月30日、「改訂 森林・林業・木材産業の将来予測-データ・理論・シミュレーション-」日本林業調査会
西川栄明、2011年3月、「木育達人（マイスター）のための木育活動ガイド」、NPO法人ねおす発行
西川栄明、2012年1月25日、「一生つきあえる木の家具と器-関西の木工家26人の工房から-」、誠文堂新光社
西川栄明、2010年8月31日、「手づくりする木のツール」、誠文堂新光社
西川栄明、2009年10月26日、「手づくりする木のカトラリー」、誠文堂新光社
西川栄明、2003年3月、「北の木と語る」、北海道新聞社
西川栄明、2001年11月、「北の木仕事-20人の工房」、北海道新聞社
バウンド、2007年8月、『家具・インテリアを仕事にする』、技術評論社
萩原健太郎、2009年8月1日、「家具と人-Living with Modern Crafts」、PNS社
早川謙之輔、2002年6月、『木工のはなし』、新潮社
北海道、2008年、「北海道森林づくり基本計画」
北海道水産林務部森林計画課、「空気も水もタダじゃない！ 第一話・第二話・第三話」
木育プログラム等検討会議・北海道水産林務部林務局会陰業木材課林業木材グループ、2010年3月、「木育達人（マイスター）入門」、北海道

山下晃功・原知子、2008年3月15日、「木育のすすめ」、海青社
置戸町社会教育50年の歩み編集委員会、2000年3月、「置戸町社会教育50年のあゆみ」
置戸町教育委員会

論文

池本恵理香、小原光博「『木育』の学習内容・学習活動に関する研究：小学校字図画工作科で実践する圧密：回復による『木ーホルダー』づくり」岐阜大学教育学部研究報告．教育実践研究

加藤武、小原光博「幼児・小学生を対象とした『木育』学習題材の開発；正確な音程の一オクターブ木琴」岐阜大学教育学部研究報告．教育実践研究

インターネットページ（全て12月最終アクセス）

「オケクラフトセンター 森林工芸館」

<http://www.town.oketo.hokkaido.jp/kougeihp/index.htm>

「北海道庁水産林務部林業木材課」

<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sr/rrm/>

「旭川市子育て支援部子ども育成課」

<http://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/files/kodomoikusei/index.htm>

「君の椅子プロジェクト」

http://www.asahikawa-u.ac.jp/page/kiminoisu_project.html

「KEM 工房」

<http://www.h3.dion.ne.jp/~kem/>

「旭川家具工業協同組合」

<http://www.asahikawa-kagu.or.jp/>

「NPO 法人ねおす」

<http://www.neos.gr.jp/>

「木育ファミリー」

<http://www.mokuiku.net/>